

幼児のコミュニケーション

―保育の現場から考える(2)―

田中三保子

最近、「むかついた」、「きれた」という表現をよく耳にするようになりました。自分のなかのためこんだ感情を外に出せなくなつて、ぎりぎりのところでついに爆発してしまうような状態をさすのでしょうか。どちらももとは気持ちや感情を言いあらわすことばではありませんでした。消化しきれないものが胃のあたりに停滞することによっておこる不快な身体的感

覚、ものともとのつながりが物理的に断たれた状態をしめす語句であつたと思うのですが、いまそれが気持ちとなつてあらわす表現として頻繁に使われているのは、人と人が適切にコミュニケーションをとることが難しくなっていることを、端的に示しているような気がします。

コミュニケーションの方法は、人が初めから身につ

けてくるわけではありません。この世に生まれてからまわりの人々とのかわりを通して学びとっていくものなのです。

ある手段、方法で自分を表現したとき、相手からある反応が返されます（反応が返らないことも含みます）。自分が表現したかったことが相手にきちんと伝わったと体験されたとき、そのとき使われた方法は有効とされて、その人のコミュニケーションのしかたとして学びとられ、身につけていきます。反対に、自分にとってつらい、自分をおびやかすような反応が返ってきたときには、その手段は意味のないもの、使わない方がよいものとして抑えこまれていきます。相手の反応が一定しないとき、たとえば、同じように表現しても相手の感情によって受け入れられたり拒否されたりするようなときには、適切な手段を学びとることができなくなってしまうだけにとどまらず、コミュニケーションをとること自体に怯えてしまうこともある

でしょう。そうした方法や手段は一度で学習されることもあれば、何度も繰り返された結果であることもあります。

幼稚園に入園してきたとき、子どもたちは、すでに彼ら彼女らなりのコミュニケーションの方法を身にかけてきています。その固有の方法で自分を表現し、まわりとかかわろうとします（表現しない・できない、かかわらない・かかわれないはあいも含みます）。そして、幼稚園という社会のなかで、その方法を修正したり、補強したりしていきます。三歳児のばあいの、具体的なようすについては、昨年度のクラスの子どもたちを例にとつて、前回述べました。今回は、「コミュニケーション」の視点から保育について考えてみようと思います。



G夫のコミュニケーション

今年度、私は昨年に引き続き三歳児を担任するとい
う、保育者として初めての体験をしました。そしてや
はり、適切なコミュニケーションの方法を知らない子
どもたちが多いという印象を改めてもちました。

このクラスには、以前から遊具として木製の汽車と
レールのセットがあるのですが、今年度の子どもたち
には格別に人気がありました。とくに男の子のばあ
い、そばに寄らない子が一人いたのを除いて、みんな
が興味を示しました。汽車の台数は家庭で使うよりは
ずっと多いのですが、それでも遊びたい人全員がある
程度満足するには十分とはいえず、連日のように衝突
が起こりました。

G夫は朝一番に来ることが多く、すぐに汽車の入っ
たかごを持ってきて、床に並べ始めます。あとから来
た子どもたちが寄っていくと、G夫は自分の遊びを
じやまされると思うのでしょうか、手を広げ身体で防ご

うとします。そして、「きーっ」と、それこそ部屋中
に響き渡るような甲高い声を出し続けます。その声に
まわりがひるむと、まるでなにごとくもなかったかのよ
うに自分の遊びを続けます。ときに、ひるまずに汽車
を取ろうとする子がいると、相手をたいたりレール
を投げたりして、そうした行為を止められると、大き
な声で泣き続けます。泣きやむまでにはかなりの時間
が必要です。

G夫はまた、自分が遊びを始めた場所からほとんど
動きません。そこに座ったまま、用があると相手に向
かって大声を出します。「ちょっと、してよ」。私も
たびたびそう呼ばれました。汽車を動かしていても、
その場所からめいっばい手を伸ばして行って、手が届
かなくなるとやっと思場所を移動し、また同じように
手を伸ばしていきます。汽車と一緒に少しずつからだ
も移動していく他の子どもたちとは、ぶつかってしま
うことになりました。G夫が座って遊んでいる格好は、
まるでお座りができるようになったばかりの乳児のよ

うで、最初、私はもしかしたら彼の運動機能が未成熟なのではないかと思ってしまったほどです。

自分は動かないで相手が自分に合わせてくれるように行動するのが、G夫が学びとってきたコミュニケーションシヨンの方法なのでしよう。一人っ子で母親ともそういうかかわりかたをしてきたようでした。私は、G夫には、奇声を用いてではなくもつと穏やかに自分を表現してもらいたいし、そういう方法があることを伝えていきたい、相手に自分をきちんと伝えるには相手と向き合うことが大切であると伝えたい、と思いました。

H夫のコミュニケーション

もう一人、汽車での遊びのなかで、大声を出すというしかたで自己主張するのが、H夫です。初めの頃、彼は隣のクラスの仲良しと外遊びをして過ごしていましたが、だんだんへやにもどってくる時間が早くなりました。帰ってくるのとたいいてい、汽車遊びのそばに

寄っていきます。そして、たぶんなんの声も発しないまま、いつの間にか汽車を走らせているのです。どうやらじつとようすを見ていて、さりげなくさつと手を出して持つていくらしいのです。持つていかれた方もなんだかわけがわからなくて、結局そのままになつてしまうようでした。実は、私にも、いつどうやってH夫が汽車を調達するのかずつとわからなかったほどなのです。そのうち、怒つて、はむかう子もでてきました。H夫は身体は小さいのですが、反応の素早さには目を見張るものがあります。ほんのわずかのあいだにつかみあいになっていて、相手の泣き声にあわてて止めにはいることもたびたびでした。そんなとき、私が相手に気をとられていると、さつとかけだして出ていつてしまいます。何かを伝えるいとまもありません。

H夫は電車がとても好きなようです。穏やかに遊んでいるときは、駅のアナウンスを真似たりして実に楽しそうです。でも、自分のイメージ通りにやれなくな

ると大変です。「ぼくが行くの。どいてよ、じゃま」。
びっくりするような大声で威圧的に言い放ちます。言
いながら、レールから他の子の電車を手で払いのけて
しまうのです。非常に強い調子の、抗弁できないよう
なものの言いかたです。そして、H夫はそのまま相手
の反応にはお構いなしに遊び続けるのですが、保育者
が彼のそばへ行こうとすると、ぱっとへやから逃げ出
してしまいます。ときどき、ずいぶんあとになって、
「さつきはごめんね」と相手に言っているのを耳にす
ることもあるのですが。

H夫は姉とは仲がよいけれど、けんかもよくするよ
うです。母親は、よほど激しいけんかでない限り、当
人同士に任せていると言っていました。彼が姉との間
で自分なりに学んできたコミュニケーションの方法
が、たとえば威圧的な言いかた、ほしいものはことば
を通してではなく隙をみて手に入れる、怒られそうに
なったらまず逃げてあとで謝る、などだったのではな
いでしょうか。

私は、H夫にも、何
よりも自分の気持ちや
意図を率直に伝えられ
るようになってほしい
と願いました。



H夫は自分を中心になって遊んでいるときには、
「ああしたい、こうしたい」ととてもよくしゃべりま
す。けれども、他の子どもたちの遊びに入りたく
思っているようなときには、ほとんど何も言えなく
なってしまいます。まわりで、うつむき加減に、時
には指しゃぶりをしながら遊びをしています。私には
彼の気持ちが痛いほどわかるのですが、三歳児にはそ
れでは伝わっていきません。「Hちゃんが入れてほし
いって」。「Hちゃんも使いたいから貸してくれる」。
H夫の目の前で、ことばだけでなく、ものの貸し借り
も含めたやりとりを幾度も繰り返しましたが、自分で
言えるようにはなかなかありませんでした。

十一月のある日、外から戻ったH夫は、汽車で遊ん

でいる子どもたちのまわりにしゃがみこみ、ようすを見ていました。I子がさつきまで使っていた汽車が三台、レールのそばに放置されています。H夫がそれに手を出そうとしたので、「それ、Iちゃんが使つていたけど、もう使つてないみたいだからきいてみたら」と声をかけてみました。H夫は自分で探さずに「Iちゃん、どこ」と聞いてきます。「あそこ、たこやきやさん」。H夫は相手が女の子だったせいもあつたのでしょうか、すぐにI子のところに行きました。「Iちゃん、使つてるよね」。I子の返事は「使つてないでしたから、H夫はすぐに汽車のところにはき返していききました。

私はH夫のききかたにひっかかりを感じました。ふつうには「使つてる?」ときくと思うのですが、彼はそうは言えないようなのです。相手に対して対等に向き合つて自分の意志を伝えられないのでしょうか、相手の気持ちを察し、相手の機嫌をそこねないように気を使いながら自分を表現しているように思えるのです。

「使つてる?」という言いまわしそのものをH夫が知らないはずはないでしょう。その言いかたにこめられる気持ち自体が今の彼の心持ちとはそぐわなくて、使うことができずにいるような気がします。「入れて」「貸して」と言えないのも、ことばの問題ではなく、優位に立っていないければ相手と向き合うことができない今のH夫の状態をあらわしているものと考えられます。

保育とコミュニケーション

コミュニケーションの方法が気持ちをあらわすものだとしたら、違うやりかたを習得して使えるようになれば、気持ちも変わってくるのではないのでしょうか。たとえば、H夫のばあいにも、「使つてるよね」のような屈折したききかたではなく、もっと率直にきいたときに、自分をしっかり受け止めてもらえたという体験が重なれば、素直に人に向き合えるようになると思います。幼児だからといっても、今までの体験か

ら自分なりに学びとってきたことは、そんなに簡単に
変えられるものではありません。とくにH夫がすでに
獲得してきたコミュニケーションのしかたは、かなり
強固に身につけてしまっているようです。いまさら他
の方法といわれても、変えるのは難しそうです。私と
しては、たとえば、H夫が自分で言えないでいること
をかわりに相手に伝えることで、彼の気持ちそのもの
は受け止めつつ、もつと穏やかな伝えかたがあるこ
と、相手の気持ちをどう感じとつたらいいかなどを目
の前で示すようにしてきました。また、相手の子ども
との実際のやりとりのなかから、どんなときに相手が
素直に感じてくれるか体験的にわかつてもらえるよう
にもしてきたつもりです。

H夫としては受け入れてもらえると思っていないかっ
たことも、きちんと伝えれば受けてもらえる体験が少
しずつ重なったのでしょうか、彼は今、大きな声を出
すことはしなくなりました。「いれて」などはまだ自
分では言えないので、私に橋渡しを頼んできますが、

それが今のH夫なりの素直な表現のしかたなのだと思
解しています。

子どもが素直に自分の気持ちをあらわせないでいる
としても、その子はその子なりになかを表現してい
ます。とくに自然でない行動をとるときは、なかを
強く訴えようとしていることが多いと判断してまちは
いないようです。子どもの行動の裏に隠されている実
はいちばん伝えたい気持ちを推しはかつて、目下の行動
ではなく、今の気持ちに素直に伝えることを繰り返し
ていくと、子どもは、まわりくどい表現をとらなくて
も、むしろ、気持ちそのままに表現した方がわかつて
もらえるし、心地よいことを感じとつてくれるようにな
ります。適切なコミュニケーションの方法を学ぶこ
とは、スキルとしての方法を習得するだけにとどまら
ず、人と人とが素直に向き合ってお互いを生かし支え
合う関係を学んでいくことと思うのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)